

委員から提出されたご意見

- テトロドトキシンはなぜ魚種としてフグだけが特異的に高濃度で体内に蓄積されるのか。食物連鎖だけでは説明できないほど多量の毒をもつフグがいる。
- 養殖トラフグの腸管に、たとえ微量であっても腸管内の微生物が産生したと推定されるテトロドトキシンが存在するので、気象や水温等の環境条件の変化によってテトロドトキシンが急増する可能性があるのではないか。
- テトロドトキシンがフグにとって外敵から身を守るために利用されているという仮説が事実であれば、習性として養殖フグも最初は微量でもいずれ高濃度にテトロドトキシンを保有するようになるのではないか。
- 貝類やヒトデなどは制御できたとしても、テトロドトキシンを産生する微生物の制御は難しいと考える。その点についての具体的対策が必要なのではないか。
- トラフグ肝臓の無毒化については、予定している養殖方法と同じ条件下での毒性データが必要である。その結果を踏まえ、摂食量を考慮してリスクを評価しなければならない。
- 天然のふぐ肝臓は全く食品として考えられておらず、諸外国においても殆ど食される習慣がない。従って、その肝臓の可食性について、諸外国にもその安全性が認められるような、よほど慎重な広汎な安全性評価が必要である。例えば動物実験等を用いた、肝臓あるいは肝臓濃縮物の飼育試験による安全性評価を実行すべきである。